

善と悪の舌。

弁財
行

【あらすじ】

須藤菊也はずっと祖父の死体を探していた。

祖父は12年前菊也の父に殺され、死体が見つかっていないのだ。ある日、河川敷で一人の男の他殺体が見つかる。死体は手足が切断され舌が無い。警察官である菊也の兄、怜也と蓮也はすぐに事件の捜査にあたる。

一方菊也は度々祖父が殺される悪夢で過呼吸に苦しんでいた。

そんな中、2人目の犠牲者が出る。被害者は菊也と同じ年齢。

時を同じくして世間では選挙がスタートした。候補者の中にはオーガニック専門家・留美子の姿もある。彼女は岸田沢村を有名にした人物であり、当時村人たちは彼女を信仰していた。

菊也の親友・岳と彼の母・早苗は、彼女のせいで村を追い出された過去がある。その娘、真由子は幼い頃から虚言癖があった。彼女は菊也の会社に入社し、やはり悪癖で騒動を起こしている。

そして岳は早苗から、小学校の担任、栄子が自殺したことを聞く。当時の同級生たちが先生を嵌め、自殺していたのだ。

そんな折、3人目の犠牲者が出た。警察の調査で被害者は全員菊也の小学校の同級生と判明。至急保護に動くが、熊谷・加藤は既に殺害。真由子、菊也は誘拐されてしまった。

搜索の最中、栄子の母、裕子が警察署に相談に訪れる。一連の事件の犯人は栄子の弟、裕也かもしれないと。

一方、誘拐されていた真由子は殺害され、菊也は裕也から必死に逃げていた。その途中、菊也は祖父の死体を見つける。留美子たちが別の廃校に隠していたのだ。そして栄子の死は自殺ではなく、その現場を目撃したため殺害されたものだを知る。菊也を殺そうとする裕也。間一髪で蓮也が発砲。菊也は助かった。しかし警察署では裕子が留美子を襲撃。裕子は裕也を囚として留美子を殺す機会を窺っていたのだ。裕子は留美子を道連れにして自殺した。

事件後、菊也は祖父との思い出の中から将来の夢を見つけ、兄たちとの蟠りを払拭して一步を踏み出したのだった。

【登場人物表】

須藤 菊也（24）（12）コールセンター勤務。怜也と蓮也の弟。

須藤 蓮也（34）警察官・捜査課。菊也の兄。

須藤 怜也（34）（22）警察官・鑑識課。菊也の兄。

長谷部 重親（28）警察官・捜査課。蓮也の後輩。

小杉 信（31）警察官・捜査課。蓮也の後輩。

平田 利一（45）警察官・捜査課。蓮也の先輩。

金丸 岳（24）（12）ガソリンスタンド店員。菊也の親友。

金丸 早苗（48）（36）岳の母。

山田 栄子（26）岸田沢村小学校 58期6年担任。

山田 裕子（58）（46）栄子の母。

山田 裕也（26）（14）栄子の弟。連続殺人犯。

岸田沢村村長（63）岸田沢村の村長

谷崎久（58）岸田沢村小学校校長。

白井 徳郎（65）真綾の父、蓮也・怜也・菊也の祖父。

須藤 聖一（43）蓮也・怜也・菊也の父。

須藤 真綾（43）蓮也・怜也・菊也の母。白井の娘。

永井 留美子（43）（31）オーガニック専門家。

永井 真由子（24）（12）留美子の娘。菊也の小学校の同級生。

江藤 文敏（24）（12）菊也の小学校の同級生。

桜庭まどか（24）（12）菊也の小学校の同級生。

坪田 恵子（24）（12）菊也の小学校の同級生。

熊谷 雄一（24）（12）菊也の小学校の同級生。

加藤 光太（24）（12）菊也の小学校の同級生。

三村 篤（34）株式会社sideinside（コールセンター）
センター長。

藤澤綾奈（34）株式会社sideinside（コールセンター）
SV。真由子の教育係。

アナウンサー 1
アナウンサー 2
老婆
鑑識
主婦 1
主婦 2
主婦 3
村人 1
村人 2
村人 3
村人 4
同僚 1
同僚 2
刑事 1
警察官
早苗の友人
記者 1
記者 2
看護師
医師

○河川敷・鉄橋下・雨（夜）

真上を電車が通り過ぎる。

江藤文敏（24）、猿轡をされ仰向けに倒れている。両腕、右足は切断されている。

山田裕也（26）、江藤の左足に包丁を叩きつける。

江藤、猿轡の中で悲鳴を上げる。

裕也、江藤の左足を切断し、壁に向かって放り投げる。

左足は壁に当たって落ち、既に切断されていた両腕、

右足の上に転がる。

裕也、鉄を取り出す。江藤の口をこじ開け、舌を掴みだす。鉄で舌を挟む。

江藤、瞳を見開く。

真上を再び電車が通り過ぎる。

江藤、痙攣した後、絶命する。

裕也、ゆっくりと立ち上がる。

足元にはクーラーボックスと手作りの冊子が置かれている。冊子は「岸田沢村6年生紹介」と書かれたページが開かれたまま。

○岸田沢村近くの廃道（昼）

錆びたチェーンが左右の木に結ばれて道を塞ぐ。真ん中に「通行止め」のプレートがぶら下がっている。その前に停められている自転車。

金丸岳（24）、軽トラを運転し、自転車横に停車する。

岳、車から降りると道路脇の獣道に入っていく。

○岸田沢村・白井家廃屋（昼）

雑草が茂っている。所々に土を掘り返した跡がある。

岳、廃屋の裏手、鶏舎だった小屋へ歩く。

須藤菊也（24）、シャベルで土を掘っている。

岳「菊也！ 手伝いに来たぞ！」

菊也、汗を拭って振り返る。

菊也「岳……」

岳、菊也に歩み寄り、ペットボトルを差し出す。

岳「見つかったか？」

菊也「……まだ」

菊也、水を飲みながら掘り返した土を見る。

岳「そっか」

岳、菊也のシャベルを取り上げ自分で掘り始める。

菊也「おい、いいよ。仕事で疲れてるだろ」

岳「そんなのお前も一緒だろ。……ところで実家の方はまだ探してねえの？」

菊也、俯く。

菊也「……行きたくねえ」

岳「でも、もしかしたらそこかもしれないじゃん。その方が可能性が高い」

菊也「……うん」

岳「ま、そのうちいこうぜ。なんだったら俺が後で様子だけでも見てきてやるよ」

岳、菊也の肩を叩き、再び掘り始める。

菊也、予備のシャベルを持つ。

菊也、岳、一心不乱に土を掘り始める。

岳「見つかるといいな、じいちゃん」

菊也「……うん」

○河川敷・鉄橋下（朝）

現場検証をしている警察。

須藤怜也（34）、江藤の遺体を撮影している。カメラを下げて鉄橋の壁を見る。

切断された手足が叩きつけられた血痕が残る。その下に4本の手足が転がっている。

須藤蓮也（34）、パトカーで現着。

長谷部重親（28）、蓮也に歩み寄り状況を説明する。

長谷部「被害者は江藤文敏、24歳。中古車ショップ店員で1週間前から無断欠勤が続いていたそうです」

蓮也、怜也に気付き歩み寄る。

蓮也「今回お前か」

怜也「お兄ちゃんに向かってご挨拶じゃーん」

長谷部「え、ご兄弟なんですか！」

蓮也「双子な」

蓮也、怜也の横に屈んで江藤の遺体に手を合わせる。

蓮也「随分酷くやられてんな」

怜也「色々飛び散ってはいるんだけど、見つからないんだよね」

蓮也「手足が？」

怜也「いいや」

怜也、江藤の口を指さす。

怜也「舌だよ」

ぽっかり開いた江藤の口は舌がない。

○道の駅『きずな』・駐車場（昼）

岳が運転する軽トラが駐車する。荷台には菊也の自転車とシャベルが積まれている。

菊也、岳、軽トラから降りる。

菊也「お前ここの弁当好きだよな」

岳「母ちゃんには内緒な。ここの奴ら嫌いだし」

菊也、岳、入り口でテレビ局が取材をしていることに気付く。

永井留美子（43）、アナウンサー1のインタビューに答えている。

留美子「農薬は体に吸収されると分解されることがなく蓄積されて、いずれ病気を引き起こします。健康な状態で長く生きるには、やはりオーガニックがとても重要なんです」

アナウンサー1「ちなみに永井さんがオーガニック専門家を志す切欠というのは何だったんでしょうか」

留美子「東京の知人からオーガニック食材の調達に苦慮していると相談を受けたことが切欠です。昔はあまり流通ルートも確立されていませんでしたから。それであればと近所の農家さんにご協力いただいて、オーガニック食材の生産から流通までを一括で行うようにしたんです」

アナウンサー1「永井さんが以前お住まいだった岸田沢村は、過去に「健康意識が高い村10選」に選ばれてテレビでも紹介されたことがあったとか」

留美子「ええ、当時は限界集落だったんですが、オーガニック食材の生産と流通に力を入れることで村を持ち直すことができました」アナウンサー1「素晴らしいですね。」

岳、遠くから取材を眺めながら眉を顰める。

岳「何が素晴らしいんだよ」

取材を見守る主婦たち、非難がましく岳を見つめる。

菊也「おい、行こうぜ」

菊也、岳の腕を引っ張り道の駅に入る。

○ダムの傍の公園（昼）

公園隅に黒いバンが駐車している。

車内のラジオからアナウンサーの声が流れている。

アナウンサー1の声「残念ながら岸田沢村は10年前に唯一の幹線道路が土砂崩れで塞がり、廃村となりました。しかし今でも元岸田沢村の皆さんでこの道の駅を拠点として安全な食材の流通に努めていらっしゃるのには本当に素晴らしいことです」

留美子の声「ありがとうございます」

アナウンサー1の声「以上、道の駅きずなからの中継でした」

裕也、運転席で古びた写真を見ている。

8人の小学生と1人の女性教師が並んでいる運動会の写真。背後の横断幕には「岸田沢村小学校運動会」の文字。

後部座席足元にはクーラーボックスが置かれている。上には古びた手作りの冊子。「岸田沢村小学校6年生の本」とタイトルが書かれている。

裕也、サイドミラーで背後を見る。

黒いバンの背後にもう一台車が駐車されている。

開きっぱなしの運転席から伸びる血まみれの男性の足。アナウンサー2の声「次のニュースです。楠木市の鉄橋下で発見された遺体について、警察は……」

○警察署・喫煙室（夜）

蓮也、椅子に座り煙草の火を見つめている。

怜也、煙草を啜えながら入室。

怜也「よう」

蓮也「おお」

怜也「すつごいやつきちゃったねえ。ここ最近平和だったのに」

怜也、蓮也の隣に座って煙草に火をつける。

蓮也「なんかわかったことあるか」

怜也「死因は失血死。後頭部も出血。おそらく鈍器で殴打された後に手足等の切断に及んだもの」

蓮也「状況から見ると犯人は被害者に強い恨みを持っている。怨恨の線が濃厚だが」

怜也「サイコパスの殺人って可能性もあるね」

蓮也、眉根を寄せて怜也を見る。

蓮也「舌か」

怜也「見つからないんだよね、どこにも。持ち帰ったって線が強い。

そっちはなんかわかった」

蓮也「今のところ目立ったトラブルはねえな、職場でも受けもよかった」

怜也「なんかああいうのを見ると可愛い弟が心配になっちゃうよ」

蓮也「(嫌そうに) ……俺のことか?」

怜也「(嫌そうに) ねえわ、それは全然ねえわ」

蓮也、鼻で笑って煙草を消す。

蓮也「……まあ、同年だからな」

○(回想) 12年前・須藤家・玄関(夜)

白井徳郎(65)、須藤聖一(43)、玄関で言い争う。

白井「何がオーガニックだ! 自分たちがどんなことをしているかわかっているのか!」

聖一「だからこれが菊也の為なんだって言っているでしょう!」

白井「死にそうになってることがか! だけ! 俺が病院に連れて行く!」

白井、菊也(12)を抱えたまま出て行こうとする。

菊也、熱を出して朦朧としている。

須藤真綾(43)「やめてよお父さん!」

真綾、白井の腕を掴んで止めようとする。

白井「やかましい!」

聖一、白井の背に向かって叫ぶ。

聖一「なんでわからないんだ！ 永井さんがそうしろって言ったんだ！ 従うのが菊也の為なんだ！」

白井「こつの、馬鹿野郎が！ 宗教みたいなものに嵌って自分の息子を殺す気か！」

白井、振り返って聖一を殴る。

聖一、転倒。

真綾、白井にしがみついて止めている。

聖一、激昂して立ち上がり、台所へ行く。包丁を掴む。

玄関まで走り、白井を背後から刺す。

白井「うわあ！」

白井、菊也を抱えたまま玄関に倒れ込む。

聖一、白井に跨り背中をめった刺しにする。

菊也、驚いて白井の腕の中から出ようとする。

菊也「じいじ！ じいじ！」

白井「逃げろ、菊……！！ 逃げろお！」

白井、菊也を懷から逃がす。

白井「逃げろ……！」

菊也、悲鳴を上げて走り出す。

○（回想） 12年前・山林・雨（夜）

菊也、獣道を走り続ける。転ぶ。

後ろから父の声が聞こえてくる。

聖一の声「きくやあー」

菊也、怯えながら立ち上がり、走り出す。

父の声が背後からずっと響く。

菊也、木の陰にしゃがみ込んで耳を塞ぐ。

○現在・菊也のアパート（朝）

スマホのアラームが大音量で鳴る。

菊也、汗だくで目が覚める。そのまま過呼吸を起こす。

ベッドの下に手を伸ばし紙袋を拾い上げる。

菊也、紙袋を口に当てて呼吸を整える。

カーテンの隙間から朝日が差し込んでいる。

アラームがずっと鳴っている。

菊也、呼吸が直り、アラームを止める。上半身を起こす。

ベット下で蓮也と怜也が大の字で熟睡している。

菊也、呆然とし、次に怒る。

菊也「起きろこのクソ兄貴共！」

× × ×

菊也、テーブルの上にサンドイッチがのった皿を置く。

菊也「なんで俺の家にいるんだよ！」

怜也、蓮也、テーブルの両脇に寝転がったまま。

怜也「(半分寝ながら) 離れて暮らす弟が心配で寝顔を見に……」

蓮也「(半分寝ながら) 家に帰るの面倒で朝飯も食いたかった……」

菊也「素直か！」

菊也のスマホのアラームが鳴る。

菊也「ああ、くっそ、時間ねえ！ (サンドイッチの皿を指さして)

それ片付けてって！」

菊也、スマホとリュックを持ち、慌てて玄関へと走る。

怜也、蓮也「(声を揃えて) いってら……」

怜也、蓮也、寝ころんだまま手を振る。

○菊也のアパート・駐輪場・外(朝)

菊也、急いで自転車のロックを外そうとする。背後から車のクラクションが鳴り、振り返る。

岳「菊也！」

岳、アパート前道路に軽トラを停車し手を振っている。

岳「遅刻かよ！ 送るから乗れ！」

菊也「悪い！」

菊也、軽トラの助手席に乗り込む。シートベルトを締める。

岳「珍しいなお前が遅刻とか」

菊也「起きたら床に兄貴たちが転がってた」

岳「(苦笑して) ああ、警察署から近いもんな……」

菊也「(舌打ちをして) 仮眠室じゃねえっつの」

岳、軽トラを発進させる。

○国道・十字路（朝）

軽トラが十字路を通り過ぎる。

交差道路側の赤信号で黒いバンが停車中。

裕也、運転席で信号を見つめている。

老婆、道路脇歩道を犬と共に歩く。

犬がバンに鼻を近づけ匂いを嗅いでいる。

老婆、犬に注意する。

裕也、サイドミラーで無表情に犬を見つめる。

信号が青になる。

裕也、アクセルを踏み、発車する。後部座席にあるクーラーボックスを一瞥する。

○国道近く・田んぼの畦道（朝）

老婆、犬と共に歩く。

用水路に走り寄る犬。

老婆「これ、あんまり近付くと落ちちやうよ」

犬が用水路に向かって激しく吠える。

老婆「なあに、ボールでも落ちてるの？」

老婆、用水路を覗き込み、悲鳴を上げる。

用水路の中に、桜庭まどか（24）の遺体が詰め込まれている。ぽっかりと開いた口には舌がない。

○株式会社 side inside・休憩室（昼）

菊也、カウンターに座りカップラーメンを食べている。

テレビで用水路から見つかった死体について放送されている。

他の社員たちがテレビを見ながらざわついている。

藤澤綾奈（34）、コーヒーを持ち菊也の隣に座る。

綾奈「お疲れ」

菊也「お疲れ様です」

綾奈「何、事件？」

綾奈、テレビに目を向ける。

菊也「みたいっすよ。ここの近くで死体が見つかったって」

綾奈「物騒ねえ」

綾奈、コーヒーを一口飲み大きな溜息を吐く。

菊也、心配そうに綾奈を見る。

菊也「なんか疲れてません？ トラブルですか」

綾奈「もうやばいのよ、私も死体になるかも」

菊也「そっちの部署新人入ったんですもんね。やっぱ忙しいですか」

綾奈「そ、すんごいのよ、今回の新人は」

綾奈、ぼんやりと天井を見上げ無感情。

菊也「そんなに？」

綾奈「OJTでちよつと指摘したら泣き出しちゃってさあ。それ以来「お腹が痛い」とか「喉が痛くて声が出ない」とか理由つけて毎日早退か欠勤。挙句「死んだおじいさんの声が聞こえた」って言っていきなり泣き出して早退。さすがにぶん殴るところだったわ」

菊也「明らかにやばい奴ですね。新卒ですか？」

綾奈「いいや、確か菊君と同じ年。ほら、あそこに座ってる永井って子」

綾奈、後ろのソファを目で促す。

菊也、横目でソファを見る。

永井真由子（24）、ソファに座り他の従業員と楽し気に話をしている。

菊也、真由子を見つめたまま、ゆっくり首を傾げる。

菊也「……永井」

○（回想） 12年前・岸田沢村小学校・校庭（昼）

真由子（12）、菊也（12）を指さす。

真由子「あんた、死ぬからね！ あたしにはわかるの！ 黒い影が見えるの！ 霊感があるんだもん！」

子供たち、菊也を囲んで囃し立てる。

子供たち「しーぬ、しーぬ、しーぬ」

真由子「絶対死ぬから！」

岳（12）、同級生たちを掻き分けて菊也の隣に立つ。
岳「ふざっけんなよ！ お前テレビの見過ぎじゃねえの！ きもいんだけど！」

真由子「はあ？ アンタに関係ないじゃん！」

山田栄子（26）「何してるの！」

栄子、校舎から声を上げて駆けつける。

菊也「先生」

真由子「むっかつく！」

真由子、子供らと逃げる。

栄子、菊也と岳の頭を撫でて心配そうに顔を覗き込む。

栄子「大丈夫？」

岳「大丈夫か、菊也」

菊也、俯きながら涙を零す。

菊也「俺に黒い影見えるって、もうすぐ死ぬって」

岳「あんなんただの妄想だって！ あいつに靈感なんてあるわけねえじゃん！」

栄子、菊也の背を優しく撫でる。

栄子「きつくくん、大丈夫よ。黒い影なんて先生がやってあげてる！
先生は強いんだから！ 大丈夫よ！」

○現在・株式会社 side inside・休憩室（昼）

綾奈、永井を見つめたままの菊也を肘で小突く。

綾奈「どうしたの」

菊也、我に振り返り視線を元に戻す。

菊也「いや、なんでもないです」

菊也、一瞬躊躇って、綾奈に向き直る。

菊也「あー……何か困ったことがあったら……」

綾奈、瞳を輝かせて菊也を見つめる。

菊也「俺は呼ばないでください」

綾奈「お前って奴は！」

綾奈、菊也を小突く。二人で笑い合う。

○国道近く・田んぼの畦道（昼）

警察が用水路に規制線を張っている。

蓮也、怜也、現着。

長谷部、蓮也に歩み寄り、報告する。

長谷部「被害者は桜庭まどか、24歳。5日前から捜索願が出されています。職場を定時で退勤。その後の足取りが不明」

怜也、遺体の写真を撮っている鑑識に近寄る。

怜也「舌、ある？」

鑑識「ありません」

怜也、蓮也に目配せをする。

蓮也「(長谷部に向けて) 江藤文敏との共通点洗い出せ」

長谷部「はい」

○菊也のアパート(夜)

菊也、帰宅。部屋の電気を点けるとサンドイッチを乗せていた皿がテーブルの上の置きっぱなし。

菊也「(怒りの表情で) あいつら……」

菊也、スマホとリュックを置き、テレビを点ける。キッチンへ向かい皿を洗い出す。

テレビからはニュースが流れる。

アナウンサー2の声「市議会議員選挙が告示され9日間の選挙戦がスタートします。これまでに56人が立候補を届け出ています楠木地区では早くも立候補者が政策を訴えていました」

菊也、キッチンからテレビを見つめる。

留美子の声「自然由来の製品を取り入れることで心身ともに清らかになり、いつまでも健康で長生きをすることができるようです。私はオーガニック専門家としてこの地域の食文化の発展と……」

○(回想) 12年前・岸田沢村・道路(昼)

菊也(12)、下校途中。

道路脇で主婦たちが噂話をしている。

主婦1「留美子さんが宣伝してるオーガニック食材って東京の人に受けがいいんですって！」

主婦2「昨日もテレビ局が取材にきてたわよね」

菊也、擦れ違い様に小さく挨拶をするが返事はない。

主婦3「お隣さんも誘われて初めてみたらしいんだけど！ 農協とは比較にならないんですってよ！」

主婦3、右手を金の形にして見せる。

主婦1「噂をすれば」

留美子(31)、テレビカメラを前に取材を受けている。

留美子「そもそも科学的なものなど人体に必要ないんです。化学肥料に頼らずに自然の恵みを受けて作られた農作物、これらを取り入れ、自身の体を自然の一部として育て上げていく。抗体や免疫力もその過程で生まれます」

菊也、横目で見ながら帰路を急ぐ。

○（回想） 12年前・須藤家・廊下（昼）

聖一（43）、真綾（43）、慌ただしく家の中を掃除している。

菊也、玄関を開け、靴を脱ぐ。

菊也「ただいま」

真綾、菊也に歩み寄る。

真綾「きつくん、おかえり。これからテレビ局の人が来るからお部屋にいてね」

聖一「すごいだろ！ 父さんテレビに映るんだぞ！ 留美子さんがうちの野菜を宣伝してくれるって！」

真綾「流石留美子さんだわ！ きつくん、明日学校にいったら真由子ちゃんにもお礼言うのよ」

菊也、嫌そうに顔をしかめる。

菊也「なんで？ 真由子ちゃん関係ないよ」

真綾「真由子ちゃんは留美子さんの娘さんでしょ！ いいからちゃんとお礼言いなさい！ ほら部屋行って！」

真綾、菊也の背を押して部屋へ行くよう促す。

菊也、足を踏ん張って母を見上げる。

菊也「お母さん、アイス食いたい！」

真綾「駄目よ菊也！ そういうのはね、添加物がいっぱい入ってて体に悪いの！ 留美子さんが言ってたんだから！」

聖一「そうだぞ！ これからはオーガニックじゃないと！ アイスとかチョコとかそんなのは毒なんだ！」

インターホンが鳴る。

留美子の声「ごめんください」

聖一、真綾、慌てて玄関に向かっていく。

菊也、両親の後ろ姿を寂しそうに見つめる。

部屋に入る。

○（回想） 12年前・白井家・外（昼）

菊也、石階段を下りて白井家に辿り着く。

鶏の声が響いている。

菊也「じいじ！」

白井（65）、家屋裏の鶏小屋から出てくる。

菊也「おお、きつくん！ 来たか！」

菊也「じいじ！ アイスたべたい！」

白井、駆け寄ってくる菊也を抱っこする。

白井「はは、ちゃんと買っておいたぞ！ いくぞ！」

白井、菊也を抱えたまま走り出す。

菊也、楽しそうに笑う。

○（回想） 12年前・白井家縁側（昼）

菊也、白井、縁側に並んで座り、アイスを食べる。

白井「きつくん、学校は楽しいか」

菊也、アイスのへらを咥えたまま苦い顔をする。

白井「どうした？」

白井、心配そうに菊也の顔を覗き込む。

菊也「……真由子ちゃんが、靈感あるんだって」

白井「（素っ頓狂な声で） 靈感？」

白井、驚く。

菊也、俯きながら小さい声で続ける。

菊也「そんで俺に黒い影が見えるって。早く死ぬって」

白井、難しい顔をして唸る。

菊也、顔を上げる。

菊也「でも岳と、栄子先生はそんなの見えないって、だから大丈夫
って」

白井「……お母さんとお父さんにはそのこと言ったか？」

菊也、再び俯く。

菊也「……お母さんもお父さんも、最近オーガニック、オーガニック
クって、いつも怒る。お菓子も食べちゃだめって」

白井、一瞬悲しそうな顔をする。菊也の頭を撫でる。

白井「そうか……でも、きつくんには、じいじがいるだろう？ ア

イスもお菓子もじいじが買っておくさ。だから大丈夫だ」

菊也「うん！」

白井「困ったことがあったらすぐにじいじに言うんだぞ。いいな」
菊也「はあい」

菊也、再びアイスを食べ始める。

白井、自分のアイスも一口菊也に食べさせる。

○現在・菊也のアパート（夜）

菊也、テーブルに突っ伏して眩く。

菊也「じいじ……」

点けっぱなしのテレビから留美子の声が聞こえる。

留美子の声「医療が一概に悪とはいいません。ですが過剰なものは逆効果です。私たち自身が本来持つ抗体や免疫力の機能を鈍化させる可能性が……」

○金丸家・リビング（夜）

点けっぱなしのテレビからニュースが流れている。

テーブルにすき焼きが準備されている。

岳、二人分の茶碗を並べて座る。

岳「あ、母ちゃん、卵！」

金丸早苗（48）「はいはい」

早苗、キッチンから卵を2つ持ってきて座る。

早苗「あゝあ。きつくんが来れないなんて残念。折角のすき焼きなのに」

早苗、卵を割りながら溜息を吐く。

岳「母ちゃんいつもいきなりなんだって！」

早苗「だってお肉の値段なんて買いにいかないとわかんないじゃないかい！ アンタ、最近きつくんとは会ってるの？」

岳「ああ、今朝も送っていったよ。珍しく遅刻しそうになって」

早苗「ちゃんと食べてるのかしら。また連れてきなさいよ」

岳「うん、誘ってみる」

岳、肉を食べながらテレビの内容に気付く。箸でテレビを指さす。

テレビでは丁度留美子の姿が映っている。

岳「最近すげえテレビに出てんね、永井のおばさん。この間も取材してたよ」

早苗、嫌そうな顔をしてチューハイを開ける。

早苗「どこで？」

岳「道の駅。またおんなじこと言ってた。オーガニックオーガニックくっつて」

早苗「今、市議会議員に立候補する人みたいよ」

岳「マジで？ いやいや無理でしょ！」

早苗「色々方法はあるのよ、人脈とか地域の認知度とか」

岳「病院に行っただけで村八分とかやってたくせに？ あの人が命令してたんだろ？ そういうのって報道されないの」

早苗「……本当にね」

早苗、テレビの中の留美子をぼんやりと見つめる。

○（回想） 12年前・岸田沢村・旧金丸家・玄関前（夕方）

早苗（36）、岳（12）を抱えて村人と言い争う。

岳、高熱でぐったりしている。

早苗「おかしくないですか？ 風邪を引いたら病院に行かせるのが当たり前でしょう！ それを行くなだなんて！」

村人1「薬なんてかえって体に悪いって言ってるんだ！」

村人2「この村はオーガニックで成り立ってるんだぞ！ 留美子さんのおかげで毎日テレビ局も取材に来てるのに、もし病院に行ってる姿を映されたら！」

早苗「馬鹿な事言わないでください！ オーガニックと病院は関係ないでしょう！」

村人3「関係ないわけないだろ！ オーガニック食品を食べ続ければ病気にだって罹らないってテレビでも言ってるんだぞ！」

村人4「村の信用に関わるんだ！ 離婚して出戻ってきたアンタにはわからないだろうがな！」

早苗「それを言うなら留美子さんだってそうじゃないですか！」

村人1「アンタと一緒にしないでくれ！ 留美子さんのおかげでや」と村が儲けられるようになってきたんだぞ！」

村人2「従えないなら出ていけ！」

村人たち、早苗に詰め寄る。

早苗、岳を抱えたまま逃げる。

早苗「岳、大丈夫だからね、すぐ病院に連れてくから！」

○（回想） 12年前・岸田沢村小学校・校門前（夕方）

栄子（26）、白井（65）、菊也（12）、小学校の前
で立ち話をしている。

菊也「おとなりの学校のお手伝い？」

栄子「そうよ、新しい学校ができたから、そのお片付け」

白井「ああ、そうか。他の小学校は先に移動したんだったか」

栄子「はい、それで校舎のお片付けに人手が必要みたいで」

早苗、岳を抱えたまま走ってくる。

菊也、岳と早苗に気付き指をさす。

菊也「岳！ おばちゃん！」

栄子、白井、慌てて早苗に駆け寄る。

栄子「がつくんのお母さん！」

白井「どうしたんだ！」

早苗「山田先生！ きつくんのおじいちゃん！」

早苗、息を整えながら岳を抱え直す。

早苗「病院に連れて行こうとしたら村の人が、行くなって……」

栄子「そんな……なんで」

栄子、白井、驚く。

岳、真っ赤な顔で呼吸が荒い。

菊也、心配そうに岳の手を握る。

菊也「岳……」

早苗「きつくん、駄目よ。岳は多分インフルだから、移っちゃうわ」

早苗、菊也の頭を優しく撫でる。

白井「来なさい。病院まで送っていこう」

白井、早苗と岳を促し、傍に駐車していた軽トラに乗
せる。

白井「きつくんはお家に帰ってなさい。山田先生、すまんが……」

栄子「大丈夫です！ 私送ります」

栄子、菊也の肩を支える。

白井「ありがとう」

早苗「すいません！」

栄子、菊也、走り出す軽トラを心配そうに見つめる。

○現在・金丸家・リビング（夜）

テレビでは留美子の姿が映っている。

早苗、複雑そうに俯く。

早苗「……テレビ、消しましょ」

岳「うん……」

岳、心配そうに早苗を見つめる。

テレビが消えると外の雨音が響く。

○岸田沢村近くの山林・雨（夜）

黒いバンが山道に停められている。

ガードレール奥の藪から断続的に悲鳴が聞こえる。

裕也、坪田恵子（24）の右足を包丁で叩き切る。恵

子の両腕は既に切断されている。

恵子「たすげ、たす、ゆるして」

裕也、恵子の顔を覗き込む。

裕也「……許してほしいか」

恵子、必死に頷く。

裕也「そうか……」

裕也、包丁を手放して鋏を持つ。楽しそうに笑う。

裕也「なら死ね」

裕也、鋏を大きく振りかぶる。

○（回想）12年前・須藤家・廊下（深夜）

菊也（12）、咳をしながら廊下を歩く。

居間に灯が点いており両親の話し声が聞こえる。

聖一（43）の声「金丸さんちが？」

真綾（43）の声「そう、岳くんがインフルに罹ったって言って病

院に連れて行ったらしいの。そのせいで村長さんが怒っちゃって」

聖一の声「そりやそうだろ、今東京のタレントさんが泊まり込みの

取材に来てるのに、もし病院に行つてるところ見られたら」

真綾の声「ねえ、ちょっと考えればわかるじゃない」

聖一の声「それで金丸さんは？ まだ村にいるのか」

真綾の声「ううん、そのまま出て行つたみたいよ。今日業者さんが荷物運び出してたの見たから」

菊也、居間を覗き込む。

菊也「お母さん……」

真綾、菊也に気付き、近寄る。

真綾「菊也、寝てないと駄目じゃない」

菊也「ふらふらする……」

真綾「熱が出たのね」

聖一「それは今、お前の体の中で悪い菌が戦ってるんだよ。大人しく寝てれば治るから」

菊也「(顔色を窺いながら) お薬……ないの？」

聖一、真綾、顔を見合わせて溜息を吐く。

真綾「岳くんの真似してるの？ 菊也」

聖一「そんなものはな、体に良くないんだ。薬なんか頼らずに自力で治さないとだめだ。な？」

菊也「でも、岳は病院行つたって」

真綾「だから村に住めなくなつて出て行つたの。菊也だってそうなりたくないでしょ」

真綾、困つた顔で菊也を説得する。

聖一、立ち上がつて菊也の腕を掴む。

聖一「ほら、いい子だから」

菊也、引き摺られるように部屋に連れていかれる。

○(回想) 12年前・須藤家・菊也の部屋(深夜)

聖一、菊也を乱暴に布団の上に転がす。そのまま振り返らず部屋を出て襖を閉める。

菊也、大きな咳をする。

廊下から両親の叱る声がする。

真綾の声「きつくん、うるさい。わざとそんなことしても無駄よ」
聖一の声「次やったら父さん怒るぞ」

菊也、タオルケットで口を押える。咳は止まらない。
部屋に菊也の鳴咽が小さく響く。

○(回想) 12年前・須藤家・廊下(深夜)

明かりが消され、静まり返っている。

菊也、こっそりと廊下を歩く。タオルケットを被り、口元を抑えている。電話機の前まで来ると受話器を取り電話をする。

暫くコールが続く。

白井（65）の声「……もしもし」

菊也「じいじ……」

白井の声「どうした、きつくん。何かあったのか？」

菊也「お薬、だめだって。でも菊も病院行きたい、じいじ」

菊也、咳が出る。タオルケットで口を抑える。

白井「待ってなさい、すぐに行くから」

菊也「うん……」

菊也、朦朧として床に崩れ落ちる。

× × ×

菊也、白井の怒声で目が覚める。視界が朧げ。

白井、聖一、玄関先で言い争う。

真綾「やめてよ、お父さん！ やめて！」

聖一「これが菊也の為なんですよ！」

白井「何を言ってるんだお前たち！ 菊也に万が一のことがあつてからじゃ遅いんだぞ！ どけ！」

白井、玄関を上がり菊也に近付く。

白井「もう大丈夫だぞ、菊也」

白井、菊也を抱え上げる。

菊也、熱でぐったりしている。

真綾、菊也を取り戻そうと手を伸ばす。

白井、背を向けて防ぐ。

真綾「やめてよ！ これがもしご近所さんにばれたら私たちまで！」

聖一「菊也は少し大袈裟に騒いでるだけなんですよ！ そんなこと

より明日はタレントさんがうちにも取材にくるんだから……」

白井「ふざけるな！ お前たちは息子と世間体とどっちが大事なんだ！ そんなだから蓮也も怜也も帰ってこなくなつたんだろが！」

白井、聖一の胸倉を掴んで怒鳴る。

白井「何がオーガニックだ！ 自分たちがどんなことをしているか

わかつているのか！」

聖一「だからこれが菊也の為なんだって言っているでしょう！」

白井「死にそうになることがか！ どけ！ 俺が病院に連れて行く！」

白井、菊也を抱えたまま出て行こうとする。

菊也、熱を出して朦朧としている。

真綾「やめてよお父さん！」

真綾、白井の腕を掴んで止めようとする。

白井「やかましい！」

聖一、白井の背に向かって叫ぶ。

聖一「なんでわからないんだ！ 永井さんがそうしろって言ったんだ！ 従うのが菊也の為なんだ！」

白井「こつの、馬鹿野郎が！ 宗教みたいなものに嵌って自分の息子を殺す気か！」

白井、振り返って聖一を殴る。

聖一、転倒。

真綾、白井にしがみついて止めている。

聖一、激昂して立ち上がり、台所へ行く。包丁を掴む。

玄関まで走り、白井を背後から刺す。

白井「うわあ！」

白井、菊也を抱えたまま玄関に倒れ込む。

聖一、白井に跨り背中をめった刺しにする。

菊也、驚いて白井の腕の中から出ようとする。

菊也「じいじ！ じいじ！」

白井「逃げろ、菊……！ 逃げろお！」

白井、菊也を懷から逃がす。

白井「逃げろ……！」

菊也、悲鳴を上げて走り出す。

○（回想） 12年前・山林・雨（夜）

菊也、獣道を走り続ける。転ぶ。

後ろから父の声が聞こえてくる。

聖一の声「きくやあー」

菊也、怯えながら立ち上がり、走り出す。

父の声が背後からずっと響く。
菊也、木の陰にしゃがみ込んで耳を塞ぐ。

○現在・菊也のアパート（朝）

菊也、汗だくで目が覚める。

怜也「きつくん！」

怜也、心配そうに菊也の顔を覗き込んでいる。

怜也「きつくん、大丈夫？」

菊也「大きく息を吐きながら」……大丈夫」

怜也「本当に？ 病院行った？」

菊也「（拒絶するように）大丈夫だって」

菊也、荒く息をしながら体を起こす。

怜也、悲しい顔をする。伸ばした手を引っ込める。

カーテンの隙間から朝日が差し込んでいる。

菊也「（バツが悪そうに）……蓮兄は？」

怜也「……まだ詰めてるよ。ニュース見た？ 連続殺人事件」

菊也「見てない……。怜兄はいいの」

怜也、菊也のベットに腰かける。

怜也「俺もまあまあ忙しいけど。帰るの面倒でこっちきちゃった」

菊也「いいよ、寝てて。俺これから仕事だから」

菊也、ベットから立ち上がる。

怜也「仕事休んで一緒に寝ようよ」

怜也、菊也の腰に抱き着く。

菊也「いやだよ！ 離せって！」

菊也、洗面所に行ってしまう。

怜也、ベットに横になる。床に落ちた手がベット下に

置かれた紙袋に触れる。その隣には心療内科の薬袋が

置かれている。

怜也「……いつになったら、聞けるかなあ」

○株式会社sideinside・執務室（昼）

三村篤（34）、デスクで書類を見ている。

綾奈、入室して三村に近付く。

菊也、その様子をパソコン越しに見つめている。

綾奈、三村に何かを言ってお手上げのポーズをする。

三村、席を立ち退室する。

綾奈、菊也と目が合い彼のデスクに近付く。

綾奈「もう無理よ」

菊也「どうかしたんですか」

綾奈「最悪よ。OJTやってたらお客様に「うぜえ」って」

菊也「マジすか」

菊也、顔を引き攣らせる。

綾奈「すぐにヘッドセット奪って謝り倒したからなんとか終息したけど、その間中ずつとずーつと半笑いな。」(ぶりっ子の真似で)だって、だって」って。それでフィードバックしたら何て言ったと思う？」

菊也「え、なんて言ったんすか」

綾奈「だって本当にうざかったんですうって大爆笑しだして」

菊也「(呆然と) 最低か……」

綾奈「最低最悪よ。もう何言ってもきかないし。三村センター長に説教頼んだ」

菊也「そうするしかないっすね」

菊也、モニタに視線を戻す。

綾奈、菊也のデスクに腰かけてぽつりと呟く。

綾奈「……面談室の監視カメラって、マイク付いてたっけ」

菊也、綾奈を一瞥し、無言でシステムにアクセスする。

○株式会社 side inside・面談室(昼)

三村、真由子、向かいあって座る。

三村「お客様に「うぜえ」って言ったって聞いたんだけど、それは本当？」

真由子、前のめりになって弁明を始める。

真由子「だって、すごくしつこかったんです！ だからつい」

三村「それはお客様に対して絶対にしてはいけないことだよ」

三村、厳しい視線を真由子に向ける。

真由子「(狼狽えて)で、でも今はカスタハラとかもあるじゃないですか」

三村「カスタハラはカスタマーハラスメントの略ですよ。お客様が企

業に対して理不尽なクレームや言動をすることです。僕も通話録音聞いたけど、今回お客様は君に対して暴言も吐いていないし不愉快な対応もしていなかったよね。優しい気な年配の女性で、君が説明している時だって一生懸命理解しようとしていた」

真由子「(笑いながら)だって、もうそろそろお昼休憩の時間だったし、なのにしつこいし！ 頭悪すぎって思ってた」

三村「(厳しい視線で) 笑えないですよ。仕事ですから」
真由子「(怯んで) あ……」

真由子、俯く。

三村「次またお客様に対して失礼な行為をした場合には、君を着台させることはできない。それを踏まえた上で、今後自分がどうするべきかよく考えてください」

真由子、唇を噛み、悔し気に俯いたまま。

三村「じゃあ席に戻って。今日は残りの時間自習しててください」
真由子、勢いよく立ち上がり面談室を退室する。

○株式会社 side inside・執務室(昼)

菊也、綾奈、モニターを見つめながら溜息を吐く。

同僚たち、菊也のデスク周りに集まり呆れている。

綾奈「(天を仰ぎ) だめだこりゃ」

菊也「(額を抑えて) 想像以上すね……」

同僚1「あの子、総務の子にも嫌がらせしてるみたいですよ」

菊也、綾奈、振り向いて同僚たちを見る。

菊也「総務、ですか」

同僚2「喫煙室で一緒になると、いつも取り巻きと一緒にクスクス笑いながらこつち見てくるって」

綾奈「小学生かよ！」

同僚2「あんまりしつこいんで「やめてください」って言ったら、なんのこと？ ってその場でニヤニヤしだして。頭にきたから「気持ち悪いんですけど」って言ってやったら今度はわざとらしく泣き出したんだって。その後はその子に虐められてるとか言いふらし始めたみたいで」

菊也「質悪……」

同僚1「相当ですよアレ。んで、結局その総務の子、今月末で辞め

るらしいですよ。退職理由が「小学生みないな人間を雇用し続けている会社に将来性を感じません」だって」

綾奈「反論の余地もない……」

同僚2「どこでもやっていける子はすぐ辞めて、どこにも行き場がない奴だけが残るんだよね」

綾奈「ちよ、やめて、それブーメランじゃない！」

綾奈、菊也、同僚たち、笑う。

○警察署・捜査課（昼）

平田利一（45）、刑事たちへ捜査状況を説明する。

平田「江藤文敏、桜庭まどか、どちらも凶器は包丁、鋏が使われている。手足切断、胴体はめった刺し。その後舌を切断。なお、切断された舌については未だ発見されていない」

蓮也、デスクに浅く腰を掛けてホワイトボードを睨む。

長谷部、入室。

長谷部「被害者の共通点、判明しました」

刑事たち、長谷部の元に集まる。

長谷部「江藤文敏、桜庭まどか。2人とも24歳。小・中学校の同級生です。岸田沢村小学校、泉沢第三中学校」

蓮也、眉間に皺を寄せて呟く。

蓮也「……岸田沢村小学校」

小杉信（31）、駆け込んでくる。

小杉「3人目でました！」

平田、蓮也、長谷部、刑事たち、驚く。

○埠頭・岸壁（昼）

恵子の遺体が首を括った状態で係船柱に吊るされている。手足、舌はない。両目を潰され口はぼっかりひらいている。

蓮也、岸壁に立ち、海底に目を凝らす。手足らしきものが沈んでいる。

怜也、蓮也の隣に立ち恵子の遺体を覗き込む。

怜也「パジャマか……。身元を証明するものはない感じだねえ」

蓮也「時間がかかりそうだが年の頃は江藤、桜庭に近い」

怜也「はあ、いやだいやだ」

怜也、溜息を吐いて踵を返す。

蓮也「……もしかしたら、菊也と同級生かもしれない」

怜也「……は」

怜也、驚いて振り向く。

蓮也、海面を睨みつけながら呟く。

○株式会社 s i d e i n s i d e ・ビル正面玄関・外（夜）

三村、ビルから出てくる。

真由子、柱の影から飛び出して三村に近付く。

真由子「三村さん！」

三村、驚いて立ち止まる。

三村「永井さん、どうしたのこんな時間に。退勤してなかったの？」

真由子、三村の前に立ち、上目遣いで見つめる。

真由子「あの、あたし、三村さんが心配で……」

三村「え、心配って？」

真由子、口元を両手で抑えながら語り始める。

真由子「……実はあたし、靈感があつて、あ、あのこんなこといきなり言われても驚かれると思うんですけど、あたしも、変な奴って思われたらどうしようって結構悩んだんですけど」

三村「え、う、うん」

三村、動揺する。

真由子「あたし、黒い影が見えることがあります。それで、随分前から三村さんの鳩尾辺りにも黒い影が見えるようになってきて……」

三村「（呆然と）はあ……」

真由子「本当なんです！それで小学校の同級生だっていつの間にかいなくなっちゃって！」

三村「え、いや、あの……」

真由子「もしかしたら手遅れになるかも。そう思ったら心配で……。この間は怒られちゃって話す暇もなかったし……」

真由子、三村の目の前で泣き始める。

○株式会社 s i d e i n s i d e ・ビル正面玄関・内（夜）

菊也、綾奈、ロビーで三村と真由子の様子を見ている。

綾奈「据わった目で」 まじで質が悪い」

菊也「(呆れて) いや、言っただけで助けましょうよ……」

綾奈「菊君も一緒に来てよ」

綾奈、菊也の腕を掴み、歩き出す。

菊也「げえ」

○株式会社 side inside・ビル正面玄関・外(夜)

菊也、綾奈、三村と真由子に近付く。急いでいる素振り
りで三村の横を通り過ぎながら声をかける。

綾奈「三村さん、クライアントお待ちですよ」

菊也「もう始めちゃってるみたいですよ、俺たちも早く合流しないと」

三村「あ、あ、待つて藤澤君、須藤君！ じゃ、永井さん、お疲れ！」

三村、慌てて2人の後を追う。

真由子、その場に立ち尽くし、3人の後ろ姿を睨みつける。

○オフィス街・歩道(夜)

菊也、綾奈、三村、歩く。

菊也、カーブミラーで真由子の様子を見ている。

綾奈「災難でしたね、三村センター長」

三村「びっくりしたよ、何あれ、え、マジなのあれ」

綾奈「あの子、ああやって仲間を増やしてるみたいですよ。面倒く

さいお局オペレーターとかもあれで手懷けたみたいで」

三村「(驚いて) 懐くんだ！？ あれで！？」

菊也「そういう話題が好きな人もいますもんね……」

三村「だからって、いきなりあんなこと言う！？ ちょ、俺本当に

ドン引きしたんだけど！」

菊也、握っていた自転車の鍵をポケットに戻す。

菊也「……子供の頃って割とよくいませんでした？ ああやって霊感あるふりして人の気を引こうとする奴」

三村「あ、ああーいいた。え、彼女そんなタイプ？」

菊也「だと思いますよ。俺小学校の時にそれ言われましたね。早く

死ぬぞって」

三村、綾奈、驚いて菊也を見る。

綾奈「え？ 何、知り合いだったの？」

菊也、気まずそうに頭を掻く。

菊也「すんません。向こうが気付いてないみたいだったんで、関わりたくないなって黙ってました」

三村「(肩を落として)言つてよ！ 俺がつつり目えつけられたじゃん」

綾奈「(嫌そうな顔で) まあ、あれは関わりたくないわ……」

三村「まあ、勤怠悪いし、次の更新面談までになんか問題起こしてくれればいなくなるか」

菊也、難しい顔をして三村を見る。

菊也「起こしますかね」

三村「起こすつてあれは。入社してから何件問題起こしてると思つてんのさ」

綾奈「(溜息を吐きつつ) 確かに」

三村「んじゃま、須藤君は黙ってた罰として俺と一杯ひっかけようか」

綾奈「お供しますう！」

菊也、三村、綾奈、談笑しながら歩いていく。

裕也、帽子を目深に被りガードレールに腰かけている。

目の前を通り過ぎる菊也をじっと見つめている。

○金丸家・リビング(夜)

早苗、洗濯物を畳んでいる。

○(回想) 12年前・金丸家・リビング(昼)

引越の段ボールが散乱している。

早苗(36)、友人と荷物を片付けている。

早苗「ごめんね、こんなこと頼んじゃって」

友人「気にしないでよ！ ねえ、それより本当なの？ 村全体で子供に薬飲ませないようにしてるって」

早苗、辛そうに頷く。

友人「そんで病院に行くだけで村八分にされたって？ 確かにあそ

こは今オーガニック農家だつていうのです。すごい売り出しているけど、そこまでするなんて……」

早苗「前からおかしいって思ってたの。どこの家でも留美子さん、留美子さんって言つてオーガニックに拘り始めて」

友人「まあ、健康意識が高い村10選つて大体的に新聞にも載つてたしね……。いいわ、ちょうどネタが欲しかったの」

早苗「記事にしてくれるの？」

友人「デスクの許可が下りたらね。ところで岳君は？ 熱下がった？」

早苗「うん、もう転校の手続きも済ませちゃった」

友人「じゃあ、あの村に戻る気ないんだ」

早苗「岳の担任の先生とも相談したんだけど、そっちの方がいいつて。留美子さんの娘も同じクラスで、変な虐めとかもしてて」

友人「変な虐め？」

早苗「そう、靈感があるつて言つて、黒い影が見えるから早く死ぬとか言い出してるの。周りの子たちを泣かせてるみたいなんだけど、皆、留美子さんの娘だからつて注意しないの」

友人「それ絶対親に放つとかれてるせいよ。周りの気を引きたいんでしょ」

早苗「そうね……」

○現在・金丸家・リビング（夜）

早苗、畳んだ洗濯物を虚ろに見つめている。

岳、バスルームから出てくる。早苗に話しかける。

岳「母ちゃん、どうしたの」

早苗、我に返る。

早苗「あ、ごめん。ぼーつとしてた」

岳「後は俺が畳むよ。母ちゃんも風呂入ったら？」

早苗「うん、お願い」

早苗、立ち上がつてバスルームに向かう。

岳、座つて洗濯物を畳み始める。

早苗、足を止めて岳に問いかける。

早苗「岳、あんた栄子先生覚えてる？ 小学校の時の」

岳、不思議そうに振り返る。

岳「ん？ 覚えてるよ。いつも真由子たちが授業ボーイコットしてた

からさ、結局俺と菊也とで先生独占してたもん」

早苗「おかげで転校してからも勉強についていけてたわよね。おバカのあんたが」

岳「ひでえ！ まあ否定しないけど。そういや、先生元気かな」

早苗、辛そうに顔を歪める。

早苗「……先生ね、自殺したのよ、あの後すぐ」

岳、驚く。

早苗「あんた言ってたじゃない。村八分にしてたこととか、報道されないのって。あの時お母さんの友たちがね、岸田沢村のこと記事にしてくれたおかげで、一時世間でも話題になったの。子供が病気になっても通院させないらしいって。拒めば村八分にされるって、ニュースになったの」

○（回想） 12年前・岸田沢村小学校・体育館（夕方）

岸田沢村村長（63）、岸田沢村小学校校長・谷崎久（58）、記者会見を開いている。

岸田沢村村長「まったくの事実無根です。私たちはいつでも子供の健康・安全を第一に考えて自治会を運営しております。住民の通院や治療を妨害したことは一度としてございません」

谷崎「確かにインフルエンザが流行し、重症化した生徒もおりました。しかし通院については各ご家庭の判断に委ねております」

栄子（26）、他の教師らと共に会見を見守っている。

記者1「ではどこからこのような話が出たんでしょうか」

岸田沢村村長「それは現在調査中です。ただ……」

岸田沢村村長、谷崎に目配せする。

谷崎、一瞬顔を歪めて俯く。その後意を決したように話す。

谷崎「……ただ、新しく赴任した教師から、そのような不適切な指示を受けた、という相談を多くの生徒から受けておりました」

谷崎、栄子を見つめる。

栄子、愕然とする。

栄子「……え？」

記者たち、栄子に詰め寄る。

記者2「失礼ですけどお名前をお伺いできますか？」

岸田沢村村長「山田、栄子先生です。6年生の担任です」

栄子、一斉にフラッシュを浴びる。

記者1「山田先生、その不適切な指示というのは具体的にどのようなことでしょうか」

記者2「子供たちの通院や治療を妨害したんですか」

記者たち、栄子を質問責めにする。

栄子、周りを見渡す。

他の教師たちは驚いたまま、誰も助けない。

栄子「ち、ちがいます！ 私はそんな……」

岸田沢村村長「(机を叩き) いい加減認めてください！ 先生！」

記者たち、詰め寄る。多くのカメラが向けられる。

栄子「そんな……」

早苗(48)の声「あつという間だったの。生放送でフルネームまで言われて、そのままそれが事実になって世間に広まって」

○(回想) 12年前・団地・山田家玄関前(夕方)

記者たち、玄関のインターホンをしつこく鳴らす。

○(回想) 12年前・団地・山田家リビング(夕方)

部屋中にインターホンと玄関を叩く音が響く。

栄子、ソファに座り頭を抱えている。

山田裕子(46)、栄子の肩を抱いている。

山田裕也(14)、栄子の後ろ姿を辛そうに見つめる。

テレビでは事件のインタビューが流れている。

留美子(31)が泣いている真由子(12)を抱きしめている。

真由子「栄子先生が、命令してきて……」

江藤(12)、まどか(12)、恵子(12)、熊谷雄一

(12)、加藤光太(12)、嘘の証言を始める。

江藤「病院にも行くなって！」

まどか「薬も飲んじゃダメって！」

○(回想) 12年前・岸田沢村小学校・6年生教室(夕方)

教室に西日が射し込んでいる。

早苗（48）の声「それからしばらくして、教室で首を吊った状態でみつかったらしいの」

天井にぶら下がる栄子（26）の首吊り死体。

○現在・金丸家・リビング（夜）

岳、呆然とする。

岳「あいつら、嘘だろ……」

早苗、額を抑え、悲しい顔で俯く。

岳、立ち上がる。

岳「おかしいだろ！ オーガニックとか広めたのは永井のおばちゃん、先生じゃない！ あいつらテレビで嘘ついて先生のこと嵌めたってことかよ！」

○加藤光太のアパート・寝室（朝）

加藤（24）、ベッドの脇に立ち、スーツに着替えている。

真由子、ベッドで横になってスマホを見ている。

加藤「お前仕事いいの？」

真由子「インフルで休むって連絡した」

加藤「どこがだよ」

加藤、呆れながらネクタイを締める。

加藤「いいよなあ、お前のところは簡単にさぼれて」

真由子「光太も休めばいいじゃん。連絡したげよっか。あたし得意だよ、そういうの」

真由子、加藤の腰に抱き着く。

加藤「（鬱陶しそうに）いらねえよ」

玄関のインターホンが鳴る。

○加藤光太のアパート・玄関（朝）

加藤、インターホンカメラを見る。

加藤「はい」

裕也、作業着姿でカメラの前に立っている。

裕也「すいません、水道局の者ですが、下の階の方から水漏れの連絡があります」

加藤「え、水漏れですが」

裕也「天井からかなり酷く漏れていると聞いてまして、よければ少し元栓の確認させていただきたいのですが」

加藤「(焦って)わ、わかりました」

加藤、開錠して玄関を開く。

裕也、背に隠した左手に電動ドリルが握られている。

○警察署・捜査課(昼)

長谷部、ホワイトボード横に立ち、説明する。

長谷部「3人目の身元判明しました。害者の氏名は坪田恵子、24歳。居酒屋店員。一人暮らしで今朝母親がアパートを訪ねたところ鍵が開いたまま、行方がわからなくなっていたそうで」

蓮也「出身校は」

長谷部「中学は別でしたが、小学校は同じです。岸田沢村小学校、58期生」

蓮也「58期……」

蓮也、ホワイトボードをじつと見つめる。

平田「岸田沢村小学校は確か、60期生を最後に廃校になったんだっとな」

長谷部「そうです。過疎化の為、付近の小学校3校が合併して廃校になりました。ただ、その前に大きな問題を起こしています」

平田「問題……?」

長谷部「58期生の担任教師が在職中に6年生の教室で自殺したんです」

刑事たち、驚く。

長谷部「教師の名前は山田栄子、当時26歳。オーガニック食品に酷く傾倒していたようで、担当する生徒たちにも熱心に勧めていたようです。子供たちが病気になっても通院することを禁止していたようです」

平田「教師にそんな権限はないだろう」

長谷部「はい、なので保護者がマスコミに告発して問題が発覚。当時は村長や校長が体育館で記者会見を行うなど、かなり話題になったそうです。そしてこの生放送で、山田栄子の名前も誤って全国放送されるという事故があり、かなりの誹謗中傷があったよう

です」

平田「それで耐えられなくなって教室で自殺した、か。58期生は全部で何名だ」

長谷部「8名です。今名簿の方を取り寄せています」

小杉、パソコンを操作しながら声を上げる。

小杉「名簿来ました」

長谷部、駆け寄って背後からパソコンを覗く。

小杉「58期生、江藤文敏、桜庭まどか、坪田恵子、加藤光太、永井真由子、熊谷雄一、金丸岳……」

小杉、長谷部、ハッとして蓮也を見る。

小杉「……須藤、菊也」

蓮也、驚く。弾かれたようにスマホを取り出し菊也に電話をする。

平田「須藤、知り合いか」

蓮也「……弟です」

電話はコール音のみ。

蓮也、捜査課から飛び出す。

平田「他の58期生たちの所在を調べろ！ 速やかに保護！」
刑事たち、慌ただしく出動する。

○岳の職場・ガソリンスタンド（昼）

岳、頭を下げて客の車を見送っている。

パトカーがサイレンを鳴らして入ってくる。

岳、驚きながら見つめる。

早苗、パトカーの後部座席から飛び出し岳に駆け寄る。

早苗「岳！」

岳「母ちゃん！？」

長谷部、パトカー横に立ち無線で報告をする。

長谷部「金丸岳、保護しました」

○菊也のアパート（昼）

怜也、玄関を開けて中に飛び込む。

怜也「きつくん！ きつくん！」

怜也、家中探し回る。カラーボックスの上に置かれた

シフト表を見つける。

今日の日付の下に休みの文字が印刷されている。

○株式会社 side inside・ビル正面玄関・内（昼）

蓮也、着信があり電話に出る。

蓮也「いたか」

怜也の声「いない、シフトだと休みになってる。会社の方は」

蓮也「出勤してない。永井真由子も欠勤。同じ会社だった」

蓮也、背後を見る。

三村、藤澤、他の刑事と話をしている。

怜也の声「今も交流があったってこと？」

蓮也「いや、逆だ。菊也が関わらないように避けていたらしい。：

…お前他に心当たりないか」

怜也の声「岳くんって、前にアパートに遊びに来てたよね」

蓮也「長谷部が保護してる、そっちに……」

割り込むように無線が入る。

無線の声「至急、至急。源天川下流、津野橋の中央橋脚に成人男性の遺体らしきものが引つかかっているとの通報有り。繰り返し。津野橋の中央橋脚に成人男性の遺体らしきものが引つかかっているとの通報有り。至急応援をお願いします」

○源天川下流、津野橋傍河川敷（昼）

複数のパトカーが停車し、捜査員たちが規制線の準備をしている。

平田、引き上げられた遺体の横に立つ。

蓮也、覆面パトカーで現着。平田に近寄る。

蓮也「平田さん」

平田「おお、弟は見つかったか」

蓮也「いえ、まだ」

蓮也、言い様ブルーシートをめくる。

熊谷（24）の遺体。手足、舌がなく、腐乱が酷い。

平田、熊谷の運転免許証を翳して説明する。

平田「害者は熊谷雄一24歳。岸田沢村小学校58期生の内の1人だ」

蓮也「随分経つてますね」

平田「かなりの上流から流れてきたみたいだな。ひょっとするとダムのあたりかもしれん」

蓮也、ブルーシートを遺体にかけて立ち上がる。ポケットから紙を取り出す。

岸田沢村小学校58期生の名簿が印刷された紙。坪田、桜庭、江藤の名前には×が付けられている。金丸の名前には丸が付けられている。

蓮也「残り3人が行方知れず……」

○金丸家・リビング（昼）

早苗、岳、ソファに座っている。

長谷部、ソファの横に立ち電話をしている。

長谷部「わかりました、聞いてみます」

長谷部、電話をそのままにして岳に尋ねる。

長谷部「菊也くんが自宅にも職場にもいないそうだ。どこか行きそうなところに心当たりはないか？」

早苗、口を抑えて愕然とする。

岳、立ち上がって叫ぶ。

岳「だったらあそこだ！」

○岸田沢村近くの廃道（昼）

錆びたチェーンが左右の木に結ばれて道を塞いでいる。

真ん中に「通行止め」のプレートがぶら下がっている。

その前に停められている自転車。スマホが自転車脇に落ちている。

スマホに足が近づく。

菊也の声「あった、よかった」

菊也、スマホを拾い上げる。

○金丸家・リビング（昼）

岳、スマホを耳に当てながら、ソファから立ち上がる。

菊也の声「はい」

岳「菊也！ 菊也！ よかった！ お前今どこにいたんだよ！」

早苗、立ち上がり、岳のスマホに呼びかける。

早苗「きつくん！ きつくん！ 無事なの！？」

長谷部、自身のスマホで報告する。

長谷部「今、菊也くと連絡がついたみたいです」

○岸田沢村近くの廃道（昼）

菊也、シャベルが入ったリュックを自転車の籠に入れ
つつ話をする。

菊也「わり、スマホ落としたのにさつき気付いて」

岳の声「今、山か。じいちゃんのところか？ 今から迎えにいくから
そこ動くんじゃねえぞ！」

背後から砂利を踏む音が聞こえる。人影が近付く。

菊也、気付かない。

菊也「どうしたんだよ、なんか兄貴たちからもすげえ着信あったん
だけど」

岳の声「連続殺人だつてよ！ 俺たち狙われてるみてえ！」

菊也、背後から影が差して振り返る。

菊也に向かつて包丁を振り上げる裕也。

菊也、咄嗟に身を引き、自転車と共に後ろに倒れる。

スマホが地面に転がる。

岳の声「菊也！？ おい、菊也！」

長谷部の声「貸して！ 菊也君！？ 菊也君！」

菊也、上半身を起こす。

裕也、ゆつくりと菊也に近寄る。もう一度包丁を振り
かざす。

菊也、横に転がる。

包丁が自転車に当たり、激しい金属音が鳴る。

菊也、立ち上がり、藪の中へ逃げる。

地面には転がったままのスマホ。

長谷部の声「菊也君！」

裕也、スマホに包丁を叩きつける。

○岸田沢村近くの山林（昼）

菊也、藪を掻き分けて走る。

○岸田沢村・白井家廃屋（昼）

菊也、息を切らして玄関から廃屋に入る。中に進み、縁側があつた場所に屈む。息を整えてから外の様子を伺う。

裕也、藪の中から出てくる。周辺を見渡して通り過ぎていく。

菊也、立ち上がろうと足元を見る。小さい写真立てが転がっていることに気付く。祖父と幼い自分が微笑んでいる写真。

菊也、泣きそうな顔で外に走り出す。

○国道・怜也の車（昼）

怜也、運転中。ドリンクホルダーにスマホが置かれている。通話中。

怜也「じいさんの家！？ もう入れないだろあそこ！」

蓮也の声「通行止めになつてるところの手前に獣道がある。そこからなら村に入れるんだそうだ」

怜也「今更なんでそんなところに行つてんのさ、きつくんったら！」

怜也、車の速度を上げる。車は大きくカーブして山道を進む。

○源天川下流、津野橋傍河川敷（昼）

蓮也、通話を終えてスマホを懷へ仕舞う。

平田「俺たちも行こう」

蓮也、平田、覆面パトカーへ近付く。

刑事1、背後から蓮也と平田を呼ぶ。

刑事1「平田さん、須藤さん！ 今、署の方に女性が」

○警察署・相談窓口（昼）

山田裕子（58）、受付の警察官に頭を下げる。

裕子「殺人事件のこと……ご相談したいことが」

裕子の背後を警察官に引率された留美子が通り過ぎていく。

留美子「真由子は無事なんですか！」
警察官「まずはこちらへ……」

○岸田沢村・須藤家廃屋（昼）

菊也、息を切らしながら生家に着く。
塀の内側は腰まで雑草が伸びている。
菊也、雑草を掻き分けて前に進み、玄関のガラスの引き戸をそつと開ける。
廃屋の中は床が腐り、天井が落ちかけている。
菊也、背後を確認してから引き戸をしめる。振り向いて一步踏み出した時、玄関横の壁に貼られた壁紙シートが目に残る。
劣化して、端がひらひらと浮いている。
菊也、ぎくりとする。

○（回想）12年前・須藤家・玄関（夜）

白井（65）、菊也（12）を抱えたまま玄関に倒れ込む。

聖一（43）、白井に跨り背中をめつた刺しにする。

菊也、驚いて白井の腕の中から出ようとする。

菊也「じいじ！ じいじ！」

白井「逃げろ、菊……！ 逃げろお！」

白井、菊也を懷から逃がす。

白井「逃げろ……！」

○現在・岸田沢村・須藤家廃屋（昼）

菊也、崩れるようにその場に座り込む。息が荒くなり、体が震え出す。
震える手を壁紙に伸ばす。端を掴み、ゆっくりと剥いて行く。
壁紙シールの中から、赤黒い血痕が染み付いた壁が出てくる。

○（回想）12年前・須藤家・玄関（夜）

白井（65）、血があふれる口を大きく開き叫ぶ。

白井「逃げろ……！」

○現在・岸田沢村・須藤家廃屋（昼）

菊也、後ろによろける。過呼吸を起こし、喉を抑える。

菊也「う……」

菊也、袖で口を押えて呼吸を整える。

嗚咽と荒い呼吸が室内に小さく響く。

玄関のガラス戸に人影が映る。

菊也、視線を玄関に向ける。

裕也、包丁を横に振りかぶり、玄関のガラス扉を破壊する。

ガラスが飛び散る。

菊也、座り込んだまま。

裕也、玄関を破壊して菊也へ近付く。胸倉を掴み、菊也の頭を壁に何度も叩きつける。

菊也、気絶し、倒れ込む。

裕也、息を整えながら立ち上がる。菊也の足を掴み、引き摺って外へ出る。

○岸田沢村・白井家廃屋（昼）

怜也、廃屋の周りを走りながら菊也を呼ぶ。

怜也「きつくん！ 菊也！」

怜也、縁側から中を覗くが家の中には誰もいない。

怜也「菊也！」

長谷部「須藤さん！」

長谷部、岳、藪の中から姿を現し、怜也に近付く。

怜也「岳くん！ 長谷部！」

岳「菊也は！？ 見つかった！？」

怜也「いや、まだだよ。ここじゃないなら……」

怜也、家屋裏手の小高い沢を見上げる。

藪の奥に須藤家廃屋の屋根が見える。

○岸田沢村・須藤家廃屋（昼）

怜也、玄関に辿り着く。

玄関のガラス戸は粉々になっている。

怜也、中に入る。見渡すと、剥がされた壁紙と古びた血痕を見つける。

怜也「(怪訝な顔で) いつのだ……、これ」

長谷部、岳、怜也に追いつく。

岳、呆然と呟く。

岳「……おかしいよ、この間来たときはこんなに壊れてなかった」

長谷部「(ぎょっとして) 来たことがあるのか」

岳「先週、様子見に……」

怜也、長谷部、愕然とする。

ガラス戸の破片の中に新しい血痕が飛び散っている。

○加藤光太のアパート・寝室(夕方)

警察官たちが規制線を張って調べている。

蓮也、手掛かりを探して辺りを見渡している。

玄関横には壁に寄りかかって座る加藤の遺体。頭上に電動ドリルが刺さったまま、両目は潰されて舌がない。

手足が切断され、血が外まで流れている。

刑事1「害者の氏名は加藤光太、24歳。保険会社勤務。今朝言い争う声を耳にしたという近所の証言がありました。元から騒がしい住人だったので気に留めていなかったようですが、先ほど捜査官が訪ねた際にドアの隙間から血が流れているのを発見しまして」

長谷部、現着。蓮也に歩み寄る。

長谷部「須藤さん。加藤光太の家族から証言がありました。加藤と永井真由子は最近になって付き合い始めたようで、昨夜も一緒だったようです」

蓮也、玄関を見る。

ハイヒールが1足、置かれている。

蓮也「誘拐された可能性が高い、か」

○警察署・会議室(夜)

平田、怜也、入り口側に座っている。

裕子、早苗、岳、窓側に座っている。

平田「では娘さんは、そもそもオーガニックの推奨などはされていないなかつたと」

裕子「（俯きながら）……はい」

早苗「刑事さん、それは事実です。栄子先生はむしろ子供たちが偏った影響を受けないようにしてくださって、（岳を見て）この子がインフルエンザに罹った時だって、村の人たちに邪魔されてたのを、通院できるように助けてくれたんです」

平田、怜也、難しい顔をする。

裕子、バックから一冊の日記を取り出し机の上に置く。

裕子「これを……」

怜也「日記、ですか？」

裕子「あの子の、日記です」

怜也、日記を手に取り、中を開く。

平田、横から日記を覗き込む。

○栄子の日記

以下、日記に書かれた栄子の字。

「オーガニックが流行りすぎててなんかこわい」

「真由子ちゃんが幽霊が見えると言いつ出した。よくない考えだけど、お母さんみたいに注目されたいんじゃない」

「がつくんが転校することになった」

「きつくんのおじいちゃんの姿が見えない」

「なんで私のせいになってるの」

「子供たちまでテレビで嘘を言い始めた。なんで」

「真由子ちゃんとお母さんが命令したらしい。校長先生が謝りに来た。留美子さんのおかげで村が生き返ったから逆らえないって。若いからどこかでやり直せるって。どうして」

○警察署・会議室（夜）

怜也、苦虫を潰した顔で日記を閉じる。

平田、深く溜息を吐いて裕子に向き直る。

平田「……なぜ、これを世間に公表しなかったのですか」

裕子「（身を乗り出して叫ぶ）しました！ したんです！ でも」

○（回想）12年前・団地・山田家玄関前廊下（夕方）

裕子（46）、買い物袋を持ち、階段を上り切る。

玄関前に立ち尽くしている裕也（14）。

ドアには「嘘つき」「出て行け」と書かれた張り紙。

裕子、張り紙を剥がし、裕也を伴って自宅に入る。

○現在・警察署・会議室（夜）

裕子、両手で顔を覆って俯く。

裕子「誰も、信じてくれなかった……」

早苗、裕子の背を撫でながら俯く。

早苗「私も、同じです。記者をやってる友人に何度も頼んだんですけど、上が、差し止めたって。あの頃、岸田沢村はオーガニック食材のおかげでブランド化してきていて、市長とか、えらい人が何人も視察にきてましたし……」

怜也、悲痛な顔で呟く。

怜也「……真実よりも利益が優先された」

裕子「もう、無理だって、思ってた。誰も信じてくれない。だからこの日記も、ずっと隠していたんです。こんなあの子が見たらって」

平田「息子さん、裕也さんですね」

裕子、頷く。

平田「その隠していた日記を、裕也さんがみつけてしまった」

裕子「13回忌の法要の時、お焚き上げしようと思っていたんです。でもそれを見つけてしまったみたいで。突然いなくなって、部屋を探したらこの日記が……。電話も解約されて仕事もいつの間にか辞めていた。あの子を探している内に、今回の事件が」

平田「裕也さんはこの日記を見て、栄子さんの自殺が教え子たちのせいだと思った可能性がある、と」

裕子、泣き崩れる。

早苗、裕子の背を撫でる。

平田、怜也、岳、悲痛な顔でその様子を見つめる。

平田、日記を手にし、再び開く。

平田「……きつくんのおじいちゃん、ということはお前の祖父でも

あるのか」

怜也「そうですね……。一応、行方不明ってことになっています」
平田「一応？」

○（回想） 12年前・須藤家・居間（昼）

怜也（22）、聖一（43）・真綾（43）と向かい合
って座り、問い質している。

怜也「いやいやいや、施設って何？　なんでそんなところに入れてる
の？」

聖一、真綾、険しい顔で説明をする。

聖一「お前たちには心配をかけたくなって言っただけでなかったんだがな、
菊也は虚言癖があるんだ」

真綾「学校のお友たちにも、随分迷惑をかけてたみたいなの、流石
にもう……」

怜也「（混乱しながら）じゃあ、じいさんのところ預けるとかは？　き
つくん懷いてたじゃん。施設よりそっちの方が絶対……」

聖一「（遮るように）お義父さんは親戚の所に旅行に行ってるんだ。
いつ帰るか分からない」

真綾「だからもう忘れなさい、怜也」

怜也「忘れろって……」

怜也、呆然と両親を見つめる。

怜也（34）の声「これ以上言っただけで無駄だからって、俺はそれ
以上何も言わなかった。でもそれからしばらくして、母さんは父
さんを殺して首を吊った。遺書も何もないままに。……俺も、蓮
也も、結局どつちを信じるとも言えないまま。どつちの言い分が
あの時正しかったのかを確かめることもしないまま。……忘れた
振りをして、菊也に接して。……だからだろうか。菊也は何も言
わない。言っただけのこと、相談してほしいことも、何も。こ
のままにすることが本当に正しいのか、今でもわからない」

○現在・警察署・会議室（夜）

怜也、少し躊躇ってから岳の方に向き直り、尋ねる。

怜也「ねえ、岳くん。ちょっと教えてほしいんだけどさ」

岳「うん？」

岳、ぱつと顔を上げて怜也を見る。

怜也「きつくくんって、なんでじいさんちに行ってたの？」

岳「あゝ、聞いてない感じ？」

怜也、頷く。

怜也「うん。だってきつくくん、法事だろうがなんだろうが実家には絶対近付かなかったから。まさか一人でじいさんのところにいつてるだなんて思ってたなくて」

岳、バツが悪そうに俯いて頭を搔く。

早苗、岳の様子を不審に思う。

早苗「言いなさい岳。私も聞いてないわ」

岳「いやゝ、うん……でもさあ……本人が、言いたくねえって思ってるから、言っていないわけだし」

早苗「岳、気持ちはわかるけど、何か隠していることがあるんなら言いなさい。こんな状況なのよ」

早苗、岳に詰め寄る。

岳、早苗から目を逸らす。

岳「いや、たぶん関係ないと思う……いや、わかんないけど……」

早苗「(岳の耳を掴んで) あんたね！」

平田、椅子から少し腰を上げて早苗を宥める。

怜也、じつと岳を見つめる。

怜也「……じいさんの家の周り、なんかすごい掘り起こされてたんだけど、あれはきつくくんがやったの？」

岳、言葉に詰まり、目を泳がせる。

平田「何か探してたのか」

岳、俯いて言い淀む。その後、決意して顔を上げる。

岳「……じいちゃんが、どっかに埋められてるんじゃないかって」

怜也、早苗、平田、息を呑む。

早苗「どういこと……？」

岳「……俺が引越した後、菊也もインフルになって。それで病院に連れて行ってもらえなくて死にそうになったら、じいちゃんが助けに来てくれたんだって。でも父親がそれを止めようとして、じいちゃんを刺したって。じいちゃんは、菊也を逃がして、でも菊也も途中で倒れちゃって、気が付いたら病院で」

○（回想） 12年前・病院・菊也の病室

菊也（12）、ベッドに寝ている。看護師が抑えつけている。

菊也「違う、お父さんが殺したんだ！ お父さんが、じいじを！」

聖一（43）、真綾（43）、医師、ベッドの傍に立つ。

聖一「菊也、なんでそんなウソを言うんだ！ じいじは旅行中だった言っただろう！」

真綾「両手で顔を抑え、泣きながら」もう耐えられない！ なんていつもそんな嘘ばかり言うの！」

医者、聖一と真綾を宥める。

医師「今は熱で混乱しているだけです、落ち着いてください」

真綾「でもいつもいつもこんな嘘ばかり吐くんです！ そうやって周りの気を引こうとして！ 先生、この子は病気なんですか！」

菊也「（泣きながら）違う！ 違う！ 信じて！」

看護師「菊也くん、落ち着いて、ね」

医師「ちよつと落ち着くお薬を出すね」

菊也「聞いてよ！ 僕の話聞いて！ 信じてよ！」

聖一、真綾、一步下がり菊也から目を逸らす。

聖一「もう、俺たちが育てるのは難しいかもしれない。ずっと耐えてきたけれど……」

真綾「もう無理よ……」

菊也、看護師と医師に抑えつけられる。

菊也「じいじ！ じいじ！ たすけて、じいじ！」

○現在・警察署・会議室（夜）

平田、怜也、早苗、愕然とする。

岳「誰も、信じてくれなくて。そのまま病院に入れられて、退院したら今度は施設に入れられて……。じいちゃんも、行方不明ってことになってたって。だから、たぶんどこかにじいちゃんの死体を隠してるはずだって。あいつずっと、じいちゃんのこと探してるんだ」

○回想・岸田沢村・須藤家廃屋（昼）

怜也、玄関に辿り着く。

玄関のガラス戸は粉々になっている。

怜也、中に入る。見渡すと、剥がされた壁紙と古びた血痕を見つける。

○現在・警察署・会議室（夜）

怜也、額を抑えて俯く。

怜也「さつき、実家に行った時、玄関に不自然な壁紙があったんです。剥がれてて、……古い血痕がありました」

平田、息を呑む。

平田「……今回の件には直接関係がないかもしれないが、そっちも調べてみる必要があるな」

怜也、頷く。

ノックの音が響く。

蓮也、長谷部、入室する。

蓮也「失礼します」

平田、怜也、立ち上がり蓮也に歩み寄る。

怜也「どうだった」

蓮也「被害者は加藤光太。岸田沢村小学校58期生の内の1人だ。

現在は永井真由子と交際中。そちらは誘拐された可能性が高い」

長谷部「あと、念の為調べたのですが、当時の岸田沢村村長、小学校校長、いずれも今年に入ってから死亡しています」

早苗、岳、驚いて立ち上がる。

裕子は座って俯いたまま。

長谷部「村長は自宅の火の不始末による火事。校長の方は駅のプラットフォームからの転落。いずれも事故として処理されています」

平田「もう一度、洗い直す必要がありますうだな」

怜也、蓮也に近付き声を潜めて尋ねる。

怜也「……永井留美子は？」

蓮也「保護してる。今は別の会議室に」

○警察署・別会議室（夜）

留美子、椅子に座り俯いている。

○警察署・会議室（夜）

平田、裕子に近付く。傍に膝をついて顔を覗き込む。

平田「もし、裕也さんが犯人だとしたら、どこか身を隠すために使われそうなところに覚えはありませんか」

裕子「(首を振りながら) いえ、そんなところはどこも……」

岳、ハッとして顔を上げる。

岳「小学校……」

早苗「え」

岳「その、もし、先生の弟さんが犯人だったとしたら、俺たちに復讐したいんだろ？ 俺たちが先生を嵌めたと思ってるから。だったら小学校とかは！？」

長谷部、首を振る。

長谷部「岸田沢村は全部搜索したが、誰もいなかった」

蓮也「いや、待て」

蓮也、スマホを取り出し地図アプリを表示する。

蓮也「統廃合した小学校は全部で3つだったか」

長谷部「は、はい」

蓮也「校舎はまだ残ってるのか」

長谷部、慌てて手帳を捲り、メモを探す。

長谷部「ええつと、1つは廃校になった段階で取り壊されています。もう片方も取り壊しの予定となっていました。岸田沢村同様、幹線道路の土砂崩れで廃村が決定したためそのまま放置されました」

平田「緊急配備だ！ 現場に急行しろ！」

○廃校・杉ノ沢村小学校・2階教室(夜)

天井に吊るされたランタンが教室を照らす。

菊也、目を覚ます。床に転がっている。両手が後ろに回され、親指は結束バンドで固定されている。

真由子の悲鳴が響く。

菊也、驚く。机と椅子の合間から声のした方を覗く。

裕也、真由子の頭を掴み、何度も拳で殴っている。

裕也「(ブツブツと呟きながら) 何が幽霊だ、何がオーガニックだ。馬鹿じゃねえのか。お前のせいで、お前らのせいで」

裕也、真由子の髪を掴み、教室の窓ガラスに叩きつけ

る。ガラスが割れ、破片が外に落ちていく。

真由子、顔がズタズタに切れている。菊也と目が合う。

真由子「(菊也に向けて) た、たすけて、たす」

裕也、菊也に気付き、掴んでいた真由子の髪を離す。

菊也、恐怖で後退る。

裕也、菊也に馬乗りになり、胸倉を掴んで持ち上げ、殴る。

菊也、反動で床に強く頭を打つ。

裕也「なあ、お前はどっちだよ」

菊也「ど、っち、って」

裕也、菊也の前髪を鷲掴み、持ち上げて顔を近づける。

裕也「嘘を吐いたのか？ 吐いてないのか」

○農道・杉ノ沢村手前(夜)

列をなして走行する複数のパトカー。

○パトカー車内(夜)

運転する蓮也。助手席に長谷部。

蓮也「なら、同時に廃校になったわけじゃないのか」

長谷部「はい、杉ノ沢村小学校と一ノ瀬谷小学校は予定通り新しい小学校へ移動したんですが、岸田沢村だけは通学路整備の工事がかなり遅れていたんです。テレビ局の取材が立て込んでるからと、当時の村長がなかなか許可しなかったようで」

蓮也「(舌打ち) 子供のことでより金のことか。いかにもあの村らしいな」

蓮也、アクセルを強く踏み込む。

○廃校・杉ノ沢村小学校・2階教室(夜)

裕也、菊也の顔を覗き込んでいる。

裕也「姉さんはずっと泣いていた。お前らが吐いた嘘のせいで仕事も、将来も無くして。名前まで報道されて」

菊也「姉さんって……?」

裕也、菊也の頭を床に何度も叩きつける。

裕也「お前の！ 先生！ 6年生の！ 時の！ 先生の！ や！

ま！　だ！　え！　い！　こ！」

菊也、脳震盪を起こし朦朧とする。

裕也、立ち上がり、菊也の腹を蹴る。

裕也「お前らにとつてはおふざけだったかもしれないけど、それで姉さんは全部無くした」

裕也、机の上に置いていた包丁を手取る。床に倒れている真由子に近付く。

裕也「わかるか、どんだけ阿呆くさいことか」

裕也、真由子の隣に屈み、髪を掴んで持ち上げる。

裕也「頑張って勉強して、頑張って資格とって、それでもまるで消耗品のおもちやみたく使い潰されて捨てられるんだ。お前らみたいな薄汚ねえ、善悪の区別もつかねえくせに無駄に小賢しいガキどもに」

裕也、真由子の眼前に包丁を翳す。

真由子、震える。

裕也「お前らなんかの為に……お前らなんかのせいで、全部無くした。全部変わった……」

裕也、俯く。表情が見えない。

裕也「(聞き取れない小声で) 母さんも……」

真由子、叫びながら裕也を押しつけて、立ち上がる。

裕也、バランスを崩して尻餅をつく。

真由子、逃げ出す。教室を飛び出す。

裕也、真由子を追いかける。

菊也、2人が居なくなつたのを確認して身を振る。結束バンドは取れない。諦めて立ち上がろうとする。床に落ちた包丁を見つける。

○廃校・杉ノ沢村小学校・1階東側階段(夜)

真由子、倒れている。

裕也、真由子の髪を掴み、段差に顔を叩きつける。

真由子「ぎゃ……」

裕也「親子揃って嘘ばっかついて、甘い汁吸ってよ。食い物にされる奴の気持ちは考えた事あんのか？」

真由子「違う、違う、あたしは、嘘なんかついてな……」

裕也「(愉しそうに) 幽霊が見えるって?」

真由子「そう、そう! あたしには見えるの! だから嘘なんかついてない! 黒い影が見えるの! 悪い物には全部!」

裕也、声を上げて笑い出す。

裕也「じゃあお前なんか真っ黒だろうよ」

裕也、階段の段差に真由子の顔を何度も叩きつける。

真由子、痙攣したように体を震わせて、動かなくなる。

裕也、ポケットから取り出した鋏で真由子の舌を切り取る。

裕也「嘘つきは舌を抜かれるって、習っただろ」

菊也、階段の手摺の影から裕也の様子を見ている。そのまま音を立てずにその場を去る。

○廃校・杉ノ沢村小学校・正面玄関前・外(夜)

黒いバンが1台停まっている。

そこに複数のパトカーが雪崩れ込み、停車する。

蓮也、長谷部、平田、パトカーから降りる。警戒しつつバンに近付き、無人であることを確認する。

蓮也、玄関脇へ走り、校舎を見上げる。

2階の教室だけ、オレンジの灯が点いている。

蓮也「あそこか」

長谷部、後部座席のクーラーボックスを開き、悲鳴を上げる。

長谷部「うわ!」

平田「どうした」

クーラーボックスには「岸田沢村小学校6年生の本」と書かれた手作りの冊子と、人の舌が5枚入っている。

○廃校・杉ノ沢村小学校・2階廊下(夜)

息を切らせて走る菊也。

窓の外に停まる複数台のパトカーに気付く。立ち止まって窓を開けようとする。鍵が錆びていて開かない。

振り向くと階段を上ってくる裕也の影。

窓を開けるのをやめて再び走り出す菊也。

進行方向の突き当りに別の階段。机や椅子、ロッカーなどの什器が積み上げられ、塞がれている。菊也、机や椅子を掻き分けて階段を降りようと藻掻く。足場を踏み外し、机やロッカーと共に階段を落ちる。大きな金属音が響く。

○廃校・杉ノ沢村小学校・西側の階段・踊り場（夜）

菊也、複数の什器の下敷きになる。呻きながら肘を付き、上体を起こす。顔を上げると、教職員用のロッカーが横倒しになり扉が開いている。中に白骨化した死体が入っている。白骨死体は12年前の白井の服を着ている。菊也、驚愕する。

○（回想）12年前・須藤家・玄関（夜）

白井（65）、血があふれる口を大きく開き叫ぶ。
白井「逃げろ……！」

○現在・廃校・杉ノ沢村小学校・西側の階段・踊り場（夜）

菊也、震えながら死体呼びかける。

菊也「じいじ……？」

死体に近付くため什器の中から這い出ようとする菊也。

菊也「じいじ、じいじ……！」

裕也、階段を下りて、菊也の背に乗り上げる。

菊也、呻く。

裕也「知らなかったのか？ お前」

裕也、不思議な顔で菊也を見る。

菊也「（絞り出すような声で）……なんで、じいじが」

裕也「校長が言ってた。みんなが隠したって」

菊也、愕然とする。

○（回想）12年前・廃校・杉ノ沢村小学校・2階廊下（夕）

岸田沢村村長（63）、聖一（43）、真綾（43）、留美子（31）、白井の死体を運んでいる。

岸田沢村村長「この中に入れよう」

岸田沢村村長、教員用ロッカーを指さす。

聖一、真綾、白井の遺体をロッカーに入れる。

聖一「見つからないですか」

岸田沢村村長「鍵を掛ければ問題ないだろ。どうせここらのもんは運び出さないで一緒に解体するんだ」

留美子「いいから早くしてよ！　ただでさえ最近はマスコミが……」

栄子「……そこで、何をしてるんですか」

岸田沢村村長、留美子、聖一、真綾、背後を振り向く。

栄子、白井の遺体を見て愕然と立ち尽くす。

栄子「きつくんの……おじいちゃん……？」

栄子、走り寄る。

栄子「きつくんのおじいちゃん、どうして！」

岸田沢村村長「抑えろ！」

岸田沢村村長、聖一、栄子を掴んで抑えつける。

栄子「何するんですか！　離して！　離して！」

留美子、傍にあつた荷造り用のロープを掴む。栄子の首にロープをかけて締め上げる。

○（回想）　12年前・岸田沢村小学校・6年生教室（夕方）

岸田沢村村長、谷崎（58）、口論している。

谷崎「なんでこちらに持ってきたんですか！」

岸田沢村村長「仕方ないだろ！　この先生はもうテレビにまで出るんだから！　下手に行方不明になって探されたら、他のもんまで見つかってしまう！」

岸田沢村村長、聖一、机の上にのぼり、栄子の遺体を天井から吊るしている。

留美子（31）、真綾、廊下から作業を見つめている。

留美子「苛立ちながら」早くしてつてば……！！」

真綾「留美子さん……」

真綾、留美子に手を伸ばす。

留美子、真綾の手を払いのける。

留美子「触らないで！　これがばれたらどんなことになるか……！！二度と私に関わらないで！」

真綾「そんな……」

真綾、蒼白になる。

○現在・廃校・杉ノ沢村小学校・西側の階段・踊り場（夜）

裕也、悲しげな顔で白骨死体を見つめる。

裕也「だから、殺されたんだ。姉さんは……それを見たから」

菊也、驚愕する。

1階から複数の足音が響いてくる。

裕也「（溜息をついて）……ここまでみたいだな」

菊也、顔を振じり、なんとか上を見る。

包丁を振り上げる裕也。

裕也「どっちにしろ、もう戻らない」

裕也、泣きそうな顔で包丁を振り下ろす。

菊也、ぎゅつと目を閉じて叫ぶ。

菊也「たすけて！　じいじ！」

蓮也「菊也！」

蓮也、1階階段から発砲。

裕也、左胸に被弾。

平田「確保！」

平田、長谷部、2階から駆け下り裕也を取り押さえる。

蓮也、他の刑事たちと1階から駆け上り、菊也に走り寄る。

蓮也「菊也！　無事か！？　菊也！」

菊也、震えながらゆつくりと目を開ける。

蓮也、菊也の顔を覗き込んでいる。

菊也、指先を動かす。両手を見る。白骨死体の手を握っていることに気付く。

ロッカーから崩れ落ちた白骨死体の腕が、菊也に伸びている。

菊也、大声で泣く。

○現在・警察署・会議室（夜）

小杉、怜也、入室する。

早苗、岳、走り寄る。

早苗「きつくんは見つかりましたか！」

小杉「はい、先ほど保護されたと連絡が入りました。このまま救急車で搬送されますが、意識はあるとのことですよ」

岳「(天を仰いで) よかった……!」

早苗「(口元を抑え、泣きながら) きつくん……!」

怜也、会議室を見渡す。裕子がいらない。

怜也「ところで、山田さんは」

早苗「あ、さつき、お手洗いに」

怜也「そうですか……」

岳「なあ、犯人って捕まったの？ やっぱり栄子先生の弟だったの？」

怜也「(困ったように) まだ、詳しくはわからないんだ。犯人と思しき男は発砲を受けて重症。現在病院に搬送されている」

突如、廊下から悲鳴が上がる。

○警察署・別会議室 (夜)

窓が開かれ、強い風が室内に吹き込む。

裕子、背後から留美子の首を絞め、抑えつけている。

留美子、泣き叫んでいる。右目にはボールペンが刺さっている。

警察官たち、裕子に落ち着くよう説得をしている。

小杉「下がれ！ 下がれ！」

小杉、警察官たちを掻き分けて2人に近付く。

怜也、岳、早苗、小杉の背後から裕子を見つめる。

小杉「山田さん、何があったんですか、一旦落ち着きましょう！」

裕子「落ち着いています。……このために来たんですから。この時のために、生きてきたんですから。私も、……あの子も」

裕子、涙を零す。

小杉「この時のためって……」

裕子、自嘲する。

裕子「この女を、あの子供達を、全員殺してやるって、約束したんです、栄子に」

怜也、小杉、早苗、岳、驚く。

怜也「……もしかして、わざと、来たんですか。警察に」

小杉「じゃあ、裕也さんは、何……?」

裕子「（穏やかに微笑みながら）子供たちの方はあの子が自分でやるって言ったんです。私はもう年だし、力の差もあるからって。親孝行な子でしょう？ ……でも、この女だけは」

裕子、留美子の目に刺さったままのボールペンを力任せに引き抜く。

留美子、悲鳴を上げる。

怜也「やめなさい！」

裕子「こいつだけは私が殺したかった！」

裕子、留美子の左目にボールペンを当て、威嚇する。

警察官たち、近寄れずに足踏みする。

裕子「そうしたら、きつとニュースになるでしょう？ 栄子の時みたいに。……今度こそ、隠されたりしないでしょう？」

小杉「隠すとは、栄子さんが実は無実だったということでしょうか」

裕子、泣きながら首を振る。

裕子「それだけじゃない！ あの子が自殺なんかじゃなくて、殺されて死んだってことも！」

怜也「……それは、誰に、ですか」

裕子「こいつによ……！」

裕子、留美子を抑えながら後退りで窓に近付く。

裕子「13回忌の時、校長が送ってきた香典の中に遺書が入ってた……。こいつが、栄子を殺したって。それで、村長たちと一緒に、自殺したように見せかけて教室に吊るしたって……！」

小杉、怜也、早苗、岳、驚愕する。

○（回想）団地・山田家・リビング（夜）

谷崎の香典と遺書がテーブルの上に置かれたまま。

裕也、座り込み呆然としている。

玄関が開く音がする。

裕子「ただいま」

裕子、リビングに入ってくる。

裕也、座り込んだまま呆然と裕子を見上げる。

裕也「母さん、これ……」

裕子「……ああ、ごめんね、母さん、片付けるの忘れちゃって」

裕子、裕也に近寄り遺書を取る。

裕也「そんなことより……！」

裕也、裕子の腕を掴む。

裕子が煤塗れであることに気付く。

裕也「……なんで、そんな汚れてんの」

裕子、虚ろな目のまま裕也に視線を向ける。

裕子「（微笑んで）なんでって、殺してきたのよ、村長を」

裕也、驚く。

裕子「台所で頭を焼いてやったの。あんなに弱っちゃって、年は取りたくないわね」

裕也「なに、言ってるの、母さん」

裕子「殺してきたのよ」

裕也「なんで……」

裕子、激昂する。

裕子「なんで！？　なんで！？　当たり前でしょう！　殺して当たり前でしょう！　あいつらは殺したのよ！　栄子を殺したの！　自殺なんかじゃなかったの！　殺したのよ栄子を！」

裕子、裕也の両肩を掴み怒鳴る。

裕子「私の娘を殺したの！　あなたのお姉ちゃんを殺したの！　自殺じゃなかった！　殺された！　そんなことも知らずにずっと、ずっと……！」

裕子、蹲り、嗚咽を漏らす。

裕也「母さん……」

裕也、裕子の肩を擦る。

裕子「他の奴らも殺してやる！　殺さないと！　殺さないと！」

裕也「母さん！」

裕子「殺さないと！　栄子！」

裕子、顔を上げる。裕也の両肩を掴み叫ぶ。

裕子「栄子！　栄子！　ごめんね！　ごめん！　母さん気付かなくて！　ごめんね栄子！　ごめんねえ！」

裕子、慟哭する。

○現在・警察署・別会議室（夜）

怜也、小杉、早苗、岳、絶句する。

裕子「あんな目に遭わせるために、あんな死に方をさせるために、

産んだんじゃないのに……！」

裕子、震えながらボールペンを握り直す。

小杉「だからって自分の息子に……」

裕子「(遮って)じゃあどうすればよかったの！ どうすればよかったのよ！ どうせ誰も助けてなんかくれなくせに！ 誰も聞いちゃくれないくせに！ 私だって！ 私だって！」

裕子、キツと留美子を睨みつける。

裕子「(絞り出す声で)こんなことさせるために、産んだんじゃないのに……！」

留美子の口の中にボールペンを突き刺す。

裕子「みんなあんたたちのせいよお……！」

怜也、小杉、警察官たち、裕子を抑えようと走り出す。

裕子、留美子を抱えたまま背後に飛ぶ。

早苗「やめてえ！」

裕子、留美子、窓の下へ落ちる。

2人が地面に落下する音が響く。

早苗、岳、その場に崩れ落ちる。

○警察署外・駐車場(夜)

車のセキュリティアラームが鳴り響く。

車のルーフに横たわる裕子と留美子の死体。

裕子の上着ポケットから、遺書と書かれた封筒と栄子の写真が落ちる。

裕子の死体から、涙が零れている。

○国道・怜也の車(夕方)

T・3か月後

怜也、運転中。

助手席から外の景色を眺める蓮也。

閉鎖された道の駅『きずな』の前を通り過ぎる。

蓮也「結局閉鎖になったな」

怜也「そりゃあんだけ事件が大々的になればね。あそこで店出していたのってほとんど岸田沢村にいた連中だし」

○菊也のアパート（夕）

怜也、蓮也、部屋に入る。スーパーの袋を持っている。

怜也「お待たせ〜！ 大好きなお兄ちゃんのお帰りですよ〜！」

菊也、キッチンから顔を出す。

菊也「おかえり、俺のすき焼きの肉」

菊也、怜也と蓮也の手からスーパーの袋を奪う。

怜也「（ショックを受けて）肉じゃなくてお兄ちゃんを見て!？」

菊也「（玄関を指さして）お帰りはあちらです」

蓮也「（項垂れて）露骨すぎるだろ」

岳、テーブルにすき焼きの材料を並べている。

岳「いやあ、兄ちゃんっていいよな。野菜だけ買っておけば肉は買ってくるもんな」

蓮也「（呆れて）お前の兄ちゃんじゃねえよ。癖にすんな」

× × ×

蓮也、真剣な顔で鍋に野菜を並べている。

菊也、キッチンでご飯を盛っている。

怜也、岳、話中。

岳「じゃあ、息子の方は、母親の命令で仕方なくやったってことはならなかったんだ？」

怜也「まあ、断定できないというかね。一応、母親の上着に入ってた遺書にはそう書いてたよ。でもそれも、最後に息子を庇うために書いたって可能性もあるし」

岳「そっか……」

岳、悲しそうな顔をする。

菊也、俯いて茶碗をぼんやりと見つめている。

× × ×

（フラッシュバック）

包丁を振り上げる裕也。

裕也「どっちにしろ、もう戻らない」

裕也、泣き出しそうな顔で包丁を振り下ろす。

× × ×

菊也、小さく呟く。

菊也「……戻らないって、先生のことじゃなかった、のか」

怜也「きつくくん？」

菊也「なんでもない……」

菊也、顔を上げる。4つの茶碗をトレイに乗せてキツチンを出す。

岳「でも結局、息子の方も死んだんでしょ？」

怜也「そ、どっかの誰かさんがねえ」

怜也、ちろりと蓮也を見る。

蓮也、微動だにせず鍋を見つめている。

蓮也「うるせ」

鍋はぐつぐつ煮えている。

岳、そわそわしながら蓮也を見る。

岳「なあ、なあ、もう肉入れてもいいんじゃないかね？」

蓮也「まだだ！ 大人しくしろ！」

菊也「犯人取り押さえてるみたいない方すんなよ」

怜也「お前、頑固なところが本当にじいさんそっくりだよな」

蓮也、怜也を一瞥する。

蓮也「じつと怜也を見つめて」徳郎に文句でもあんのか」

怜也「(慌てて) ねえよ！ 怖いこと言うな！」

菊也「(真剣に頷く) これ、あれだな。出るな」

岳「(真剣に頷く) 出るな、出る出る。確実だよ」

怜也「(半泣きで) やめてよ！ 怖い！」

菊也、座ってテーブルに茶碗を並べる。

怜也「さすがにもういいだろ」

蓮也「仕方ねえな」

蓮也、肉を入れ始める。

岳「は〜！ やつと食える！」

怜也、蓮也、菊也、岳、食べ始める。

蓮也「そういやお前、警察学校受けるって言ってたな」

岳「あ、そうそう！ 今絶賛受験勉強中！」

怜也「(ニコニコして) 俺たちを見て憧れちゃったとか？」

岳「いや、長谷部さんと小杉さんがかつこよかったから」

蓮也「(舌打ちして) 長谷部の奴、絞める」

怜也「(舌打ちして) 小杉も絞める」

菊也「(呆れて) 後輩虐めんなよ」

岳、菊也の肩を叩く。

岳「菊也もだよな！」

蓮也、怜也、ぎよっとする。

怜也「え、ちよっと待って！ きつく人も警察官になりたいの！？」

蓮也「（怒りながら）長谷部と小杉のどこがいいんだ！ あんな奴ら短足だしモテねえし、ただの軟弱者じゃねえか！」

怜也、蓮也、菊也に詰め寄る。

岳「（呆れて）後輩の扱いひどすぎねえ？」

怜也・蓮也「うるさい！」

菊也「そうじゃなくて……」

菊也、俯いてもごもごする。

岳、菊也の背を押す。

岳「自分で言うって言っただろ。頑張れ、菊也」

怜也、蓮也、首を傾げる。

菊也、意を決して顔を上げる。

菊也「警察官じゃなくて、養鶏場、作りたいんだ」

蓮也「養鶏場？」

怜也「あ、もしかして、昔じいさんが鶏小屋つくってたから？」

菊也、照れ臭そうに頷く。

菊也「世話とか、手伝うの楽しかったから。……できれば、農業大
学入って勉強したいと思ってる。そんで、いつか、大きい養鶏場
作りたい」

怜也、蓮也、嬉しそうに微笑む。菊也の頭を力一杯撫
でる。

怜也「いいじゃん、いいじゃん。兄ちゃんも協力するよ！」

蓮也「引退したら雇ってもらうから頼むぜ」

菊也「（吹き出して）ちゃっかりしてんな」

室内に笑い声が響く。

部屋の隅にあるカラーボックスの上に骨壺が置かれて
いる。その手前に小さい写真立てが飾られている。廃
屋にあった、白井と幼い菊也の写真。

カラーボックスの足元に置かれたごみ袋には紙袋と心
療内科の薬袋が入れている。

了